

13	豊橋	芦原小学校	スズキ マヤ 鈴木 真矢
分科会番号	特	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会

研究題目

多様な考えや感じ方にふれ、自己を見つめ直すことで、
他者とともによりよく生きることについて考えを深める子の育成
—小学校4年 総合単元「自分も友達も大切に」の実践を通して—

研究要項

1 主題設定の理由

本学級の児童は、クラスの友達が困っているときに自然と助けようとする事ができる。休んでいた子が学校に来たときにさりげなく声をかけたり、給食の時間にお皿を落としてしまった子がいると、周りにいる子が手伝おうと集まってきたりする姿が見られた。道徳の時間には、自分の思いを素直に表現することができる子が多い。友達の意見に対しては、「なるほど」「そんなことないよ」などのつぶやきが多くあり、自分の考えと比べながら聴くことができている。しかし、自分の意見とは異なる意見に対して否定するなど、他者の考えを受け入れないこともよくある。これは、人はそれぞれ考えや感じ方が違うという他者理解が不十分なことが原因だと考えられる。

小学校学習指導要領では、道徳科の目標として、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考える学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」としている。4年生の段階では、これまでの経験から自分自身を振り返ることと、友達とのかかわり合いの中で自分とは違う考えにふれることで、自己を見つめていくことが大切であるとする。

これらのことから、さまざまな考えや感じ方にふれ、じっくりと自分自身を振り返る場面を設定することで、他者の考えを受け入れ、よりよい生き方につなげる考えをもつことができるようになってほしいと願い、本主題を設定した。また、本実践では、相互理解や友情・信頼、さらによりよい学校生活などの内容項目と読み聞かせや教科領域を関わらせながら総合単元的に取り組むことで、自分のことも友達のことも大切にできる子をめざしていく。

2 目ざす児童の姿

多様な考えや感じ方にふれながら自己を見つめ直し、
他者とともによりよく生きることについて考えを深めていくことができる子

3 研究の構想

(1) 研究の仮説

道徳の時間に、自分自身の経験や考えを振り返り、他者の考えと比較しながら自己を見つめ直していくことで、多様な考えがあることを理解し、自分の考えを深めたり広げたりすることができるだろう。

(2) 研究の手だて

手だて1 事前アンケートの活用

道徳の授業の前に事前アンケートを行い、これまでの経験を問い、道徳的な価値に対して今までの自分はどうかを振り返らせておく。このアンケートを授業の初めと後半に活用し、自己を見つめ直す場面を設定することで、それぞれの道徳的価値に対して考えを深めることができるだろうと考える。

手だて2 思考ツールの活用

子どもたちの多様な考えを可視化し、他者の考えとの類似点や相違点をわかりやすく整理できるスケールやクラゲチャートなどの思考ツールを活用する。このことにより、子どもたちは多様な考えにふれ、自分の考えを広げることができるだろうと考える。

(3) 抽出児童について

仮説の有効性を検証するために、抽出児童としてA児を設定し、授業中の発言や、ふり返りを通して変容を見とっていく。A児は、正義感が強く、してはいけないことをしている友達に注意をすることができる。また、自分の意見をしっかりとっており、授業中も自分の意見を堂々と他の児童に伝えることができる。一方で、友達の言っていることは理解できても、自分の意見を曲げることがなく、「自分ならそうは思わない」「どうしてできないの」などのつぶやきが多い。話し合いの中で、自分の考えに固執してしまうため変容が見られないことや、相手の気持ちに寄り添えないことがある。そこで、道徳の授業を通して、道徳的価値に対して大切だとわかっているけどできない人間の弱さや多様な考えがあることを理解したうえで、自己を見つめ直し、考えを深め広げていく姿を期待したい。

4 仮説実践のための検証授業

検証授業Ⅰ

- (1) 教材名 「つまらなかった」
内容項目 B 相互理解, 寛容
- (2) ねらい 何気ない言葉を巡ってすれ違う2人の気持ちを考えることを通して、自分の気持ちを相手に伝えるとともに、相手の気持ちを受け止めることの大切さに気づき、お互いをわかり合おうとする心情を育てる。

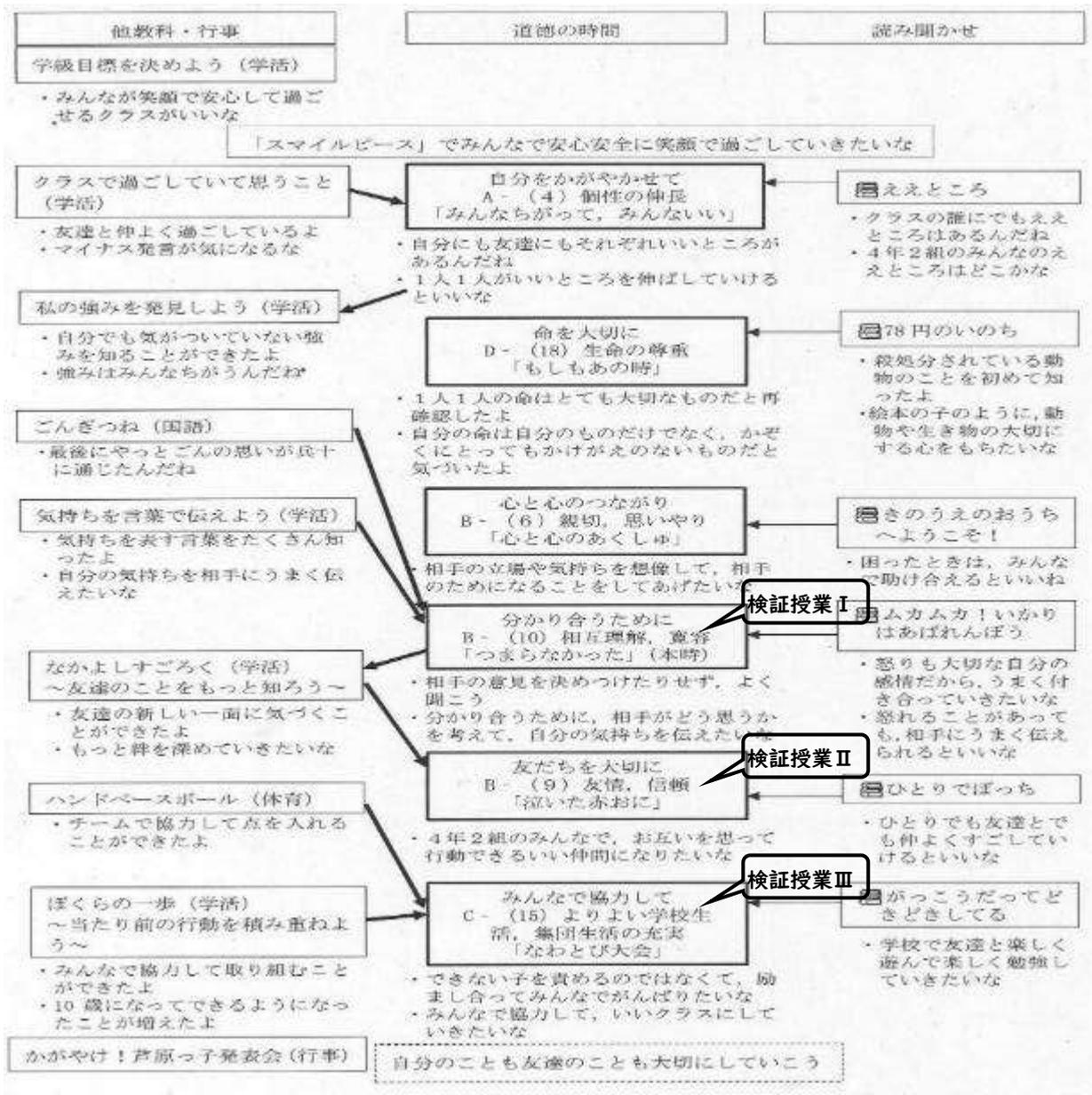
検証授業Ⅱ

- (1) 教材名 「泣いた赤おに」
内容項目 B 友情, 信頼
- (2) ねらい 赤おにの青おにに対する心情の変化を通して、友情や信頼について考え、互いに大切にしようとする判断力や心情を育てる。

検証授業Ⅲ

- (1) 教材名 「なわとび大会」
内容項目 C よりよい学校生活, 集団生活の充実
- (2) ねらい よりよい学級にするためにはどうしたらよいか考えることを通して、互いに思いやりをもって接したり、協力しようとしたりする実践意欲と態度を育てる。

5 総合単元構想図



6 研究の実践と考察

(1) 検証授業Ⅰ：教材「つまらなかった」を通して「相互理解，寛容」について考える

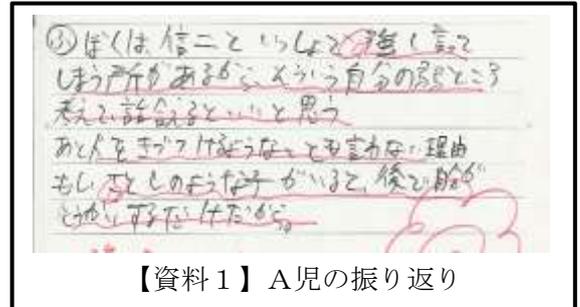
本授業の前に道徳的価値に対して、今までの自分をふり返ることができるように、「友達の気持ちがわからなくて困った経験」と、「友達と気持ちをわかり合うために大切なことは何だと思うか」を問う事前アンケートを行った。(手だて1) A児は、それぞれの項目について「相手の気持ちがわからなくて困ったことはない」「友達とわかり合うためには、相手はどんな気持ちか考えることが大切だと思う」という考えをもっていた。学級全体では、困った経験があるが27人、ないが6人であった。困った理由としては、「声をかけたけど、なぜか無視されたから」「泣いている子に声をかけても、黙っている理由がわからなかった」などがあつた。

授業の導入でこのアンケート結果を子どもたちに伝えると、「うそー」「ほとんどの子が困ってるね」というつぶやきがあり、相手の気持ちがわからなくて困っている子が予想以上に多かったことに驚いていた。そして、多くの子が相手の気持ちを理解することに難しさを感じていることを共通理解すること

ができた。

教材範読後、二人の何が問題なのかを話し合うように視点を与えて意見交流をした。問題点としては、信二が強い言い方をしたからだと考える児童がほとんどで、さとしが黙ったままだったことが問題だと考える子は少なかった。そこで、さとし側の問題点も捉えられるように、視点を変えた発問をすることにした。まず、強く言われたさとしの気持ちをおさえるため、「どうしてさとしは黙ったままだったのかな」と発問した。それに対して、「つまらないと言われて悲しかったから」「信二はぼくと遊びたくないのかなあと思ったから」など、強く言われて言い返せないさとしの気持ちに共感できた。その後、さとしに対する信二の気持ちを問いかけたところ、「どうして何も言ってくれないんだろう」「自分の気持ちくらい言えるだろう」と、何も言わないさとしに戸惑う信二の気持ちも捉えることができた。それぞれの立場で考え、お互いの気持ちにずれがあることをおさえたところで、事前アンケートで多くの子が相手の気持ちがわからず困っていることに立ち返り、自分が信二だったらどうなのかを考えさせた。言葉で伝えてくれないければ相手の気持ちがわからないから、「それでも（強く言われても）、自分の気持ちを伝えないといけない」「このままだと仲よしに戻れない」と発言した。事前アンケートを活用したことで、強く言った信二だけが悪いのではなく、自分の気持ちを伝えられないさとしの問題にも目を向けることができた。そして、この後、自分の気持ちを相手にどのように伝えたらよかったかということにつなげていくことができた。

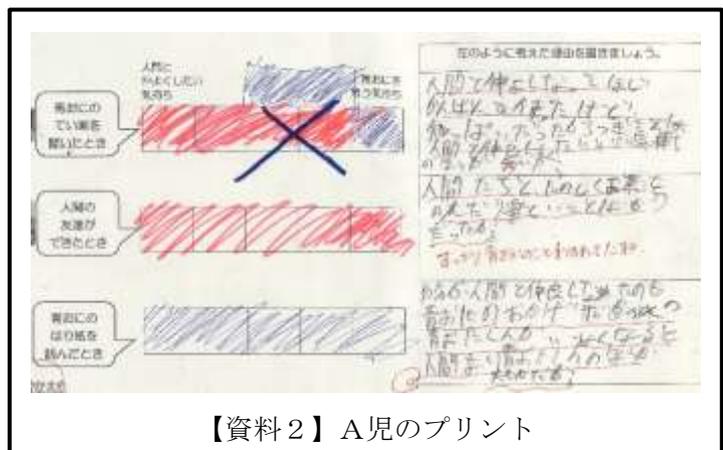
ふり返りでA児は、「ぼくは信二といっしょで強く言うてしまうところから、そういう自分の弱いところを考えて話し合えるといいと思う」と記述した。(資料1) A児は、相手に自分の考えをはっきりと言えるので、さとしの気持ちには共感できななかったが、相手の気持ちを考えない自分の言動を自分の弱いところと捉え、自分の行動を見直したいという思いをもつことができた。



(2) 検証授業Ⅱ：教材「泣いた赤おに」を通して、「友情、信頼」について考える

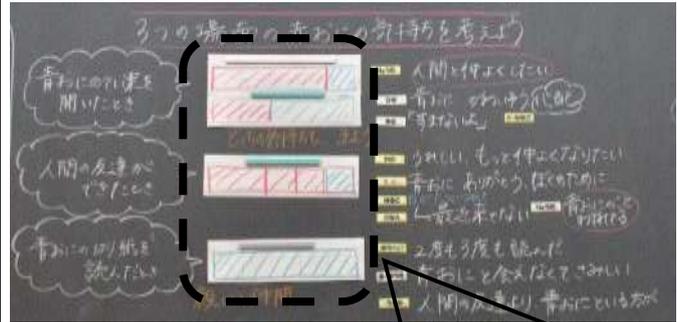
本授業では、スケールを活用して赤おにの気持ちの変化を視覚的に捉えられるようにした。

教材範読後、赤おにの中に「人間たちと仲よくしたい気持ち」と「青おにを思う気持ち」があることを確認した。その後、それぞれの場面で二つの気持ちがどのくらいを占めているかを考えるため、各自がスケールのついたプリントに二つの気持ちの比率を色で表せるようにした。(手だて2) まず一人で考えた後、席を離れて友達と交流する時間を設けた。A児は、自分とは違うスケールを書いた子を見つけて意見を交流し、「たしかにそういう考えもあるな」とつぶやいた。その後、青おにを思う気持ちのマスを書いた子を一つだけ塗っていたところを三つに塗り替えていた。(資料2) A児は、普段自分の考えに固執するところがあるが、スケールでお互いの考えを交流したことで、考えの違いを捉えやすく、自分の考えを柔軟に変えることに役立ったといえる。(資料3)



全体的話し合いでは、多少の差はあるものの、【人間の友達ができるとき】は「人間と仲よくしたい気持ち」が大半を占め、【青おにの貼り紙を読んだとき】は「青おにを思う気持ち」が大半を占めていたことを確認できた。最初【青おにの提案を聞いたとき】には、青おにを殴ってまで人間と仲よくしたいのかという迷いがあったのに、人間の友達ができただけで、青おにを思う気持ちが激減してしまった気持ちの変化を捉えることができた。スケールで赤おにの気持ちの変化を可視化することで、友達だと思っ

【資料3】 気持ちの程度を数値化して表すことができる思考ツール



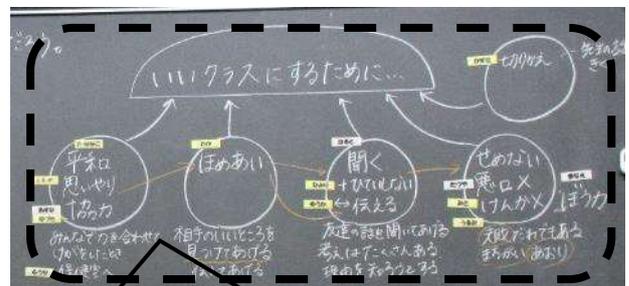
気持ちがどのくらいか数値で表すことができるスケールを用いて、赤おにの気持ちを考えて。一目で友達の考えが分かり、交流することができた。

(3) 検証授業Ⅲ：教材「なわとび大会」を通して、「集団生活の充実」について考える

学級の現状を見つめるため、「4年2組はよいクラスだと思うか」とその理由を問う事前アンケートを行った。(手だて1) A児は、「喧嘩が多いから、よいクラスだと思わない」「よいクラスにするには喧嘩をなくす」と考えていた。学級全体では、よいクラスだと思うが24人、思わないが8人であった。授業の導入でアンケート結果を伝え、「思わない人が意外と多い」とのつぶやきがあった。そこで、クラスのみんながよいクラスだと思えるようにしたいという思いが高まった。

教材範読後、なわとびの練習がうまくいかないとき、クラスの子どもたちはどんな気持ちだったのかと発問した。それに対して、「他のクラスはとべているのに、うまくいなくていらいらしている」「誰かがひっかかったのかな」など、クラスの雰囲気がよくないことに着目する発言が出た。そこで、引っかかってしまった子の気持ちを捉えさせたいと考え、「引っかかってしまった子はどんな気持ちだろう」と発問をしたところ、「みんなに責められて悲しい」という意見が出された。せめる側・せめられる側の両者の立場で考えた後、事前アンケートに立ち返り、4年2組でも同じような出来事があったことを想起させ、4年2組をよりよいクラスにするためにどうしたらよいかをクラゲチャートを用いて考えることとした。(手だて2) クラゲの頭の部分には、課題である「いいクラスにするために…」を記入し、それに対する方法を足の部分に書いた。子どもたちからは、思いやりに関することや、相手の意見を否定しないようにすることなどが出された。多くの意見が出る中で、「全部つながっている」というつぶやきがあった。そこで、「どういうこと？」と問い返すと、「思いやりを意識すると褒め合って、褒め合うことは友達の意見を責めずに伝え合うことができているいいクラスになると思う」と説明した。クラゲチャートで子どもたちの考えを分類してまとめていくことで、考えが整理され、それぞれの考えのつながりにも気づくことができたのではないかと考える。(資料4)

【資料4】 自分の考えを整理するための思考ツール



クラゲの頭の部分に課題である「いいクラスにするために…」を書き、それに対する方法を足の部分に書く。課題と方法の関係が分かりやすくし、自分の考えを整理できるようにする。

ふり返りでは、事前アンケートと授業の話し合

いを通して、これからどうしていきたいかを考えさせた。(手だて1) A児も「喧嘩をなくすために、思いやりの気持ちをもっていいクラスにしたい」と記述し、具体的によいクラスにする方法を考え、クラスへの思いを高めていくことができた。

7 研究の成果

手だて1 事前アンケートの活用

検証授業Ⅰでは、A児は事前アンケートにおいて「相手の気持ちがわからなくて困ったことはない」「友達とわかり合うためには、相手はどんな気持ちか考えることが大切だと思う」という考えをもっていった。A児は、もともと相手を言葉で攻撃してしまう傾向があるので、さとの気持ちに共感することは難しかったが、ふり返りには、「ぼくは、信二といっしょで強く言うところがあるから、そういう自分の弱いところを考えて話し合えるといいと思う」と記述し、自分自身の行動を見直すことができた。

検証授業Ⅲでは、A児はアンケートで「喧嘩が多いから、いいクラスだと思わない」「いいクラスにするには喧嘩をなくす」と考えていた。教材を通してよいクラスについて考えた後、自分たちのクラスに立ち返り、具体的な方法を考えたことで、ふり返りでは「喧嘩をなくすために、思いやりの気持ちをもっていいクラスにしたい」と記述し、よりよいクラスにしようとする思いを高めることができた。

事前アンケートによってこれまでの経験を思い出し、今までの自分をふり返ってから授業に臨んだ。さらに、授業の中でも事前アンケートに立ち返り、再度自己を見つめ直す時間を設けたことで、それぞれの道徳的価値に対して考えを深めることができた。よって手だて1は有効であったといえる。

手だて2 思考ツールの活用

検証授業Ⅱでは、A児ははじめ、青おにの提案を聞いた時の気持ちは、「人間と仲よくしたい」に四つ、「青おにを思う気持ち」に一つ色をスケールに塗っていた。その後、スケールを見せ合いながら意見交流をしたことで、自分とは異なる考えにふれ、スケールを塗り直す様子がみられた。

検証授業Ⅲでは、意見交流で出た意見をクラゲチャートに整理して板書したことで、「全部つながっている」「思いやりを意識すると褒め合って、褒め合うことは友達と意見を責めずに伝え合うことができいいクラスになると思う」と気づいた子がいた。A児もその考えに共感したようで、うなずきながら聞いていた。振り返りでは、「喧嘩をなくすために、思いやりの気持ちをもっていいクラスにしたい」と、友達の考えをもとに前向きな考えを記述することができた。

思考ツールを用いて考えを可視化したことで、自分の考えと友達の考えを比較しやすくなり、多様な考えや感じ方があることを理解して、考えを広げることができた。よって手だて2は有効であったといえる。

8 成果と今後の課題

今回の研究で行った事前アンケートと思考ツールの活用は、児童が今までの自分を見つめ、多様な考えにふれた上で、再度自己を見つめ直す際には大変有効であったと考える。

A児は、年度当初には、得意なドッジボールをするときに、自分本位で相手にボールを当てることしか考えていなかったが、検証授業を含む総合単元を進める中で、苦手な子も楽しめるように気をつけて投げたり、ときにはルールを変えたりして、自分も相手も楽しめる方法を考えられるようになった。単元終盤の芦原っ子発表会の練習では、発表をよくするために、「もっと大きい声を出した方がいいよ」「〇〇も放課と一緒に練習しよう」などと友達に声をかける姿が見られるようになり、目ざす姿に近づくA児の成長が感じられた。

一方、今回、道徳の授業を中心に絵本の読み聞かせや他教科も含めた総合単元を構想したものの、道徳の授業以外での子どもたちの姿や変容を見とることができなかった。総合単元の有効性を確かめるため、他教科や日常生活と道徳の授業を関連させて変容を捉えていく工夫をしていくことが今後の課題であると考える。